

3 伊場大溝における円頭大刀出土の意義

(1) はじめに

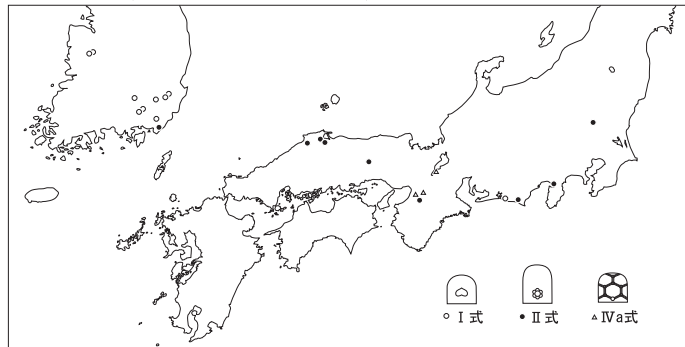
前節までの検討によって、鳥居松遺跡出土例の系譜と製作時期を明らかにし、円頭大刀の推移を示した。ここでは、時期別にみた円頭大刀出土地の検討を通じ、この大刀が西遠江地域にもたらされた経緯について触れる。鳥居松遺跡例は、自然河川（伊場大溝）の川底で検出されるという装飾大刀としては極めて異例の出土状態が確認された。本例の出土状態からうかがえる河川祭祀の実態について整理するとともに、伊場大溝に稀少な装飾大刀が沈められた意義について検討しておくたい。

(2) 円頭大刀保有の意味

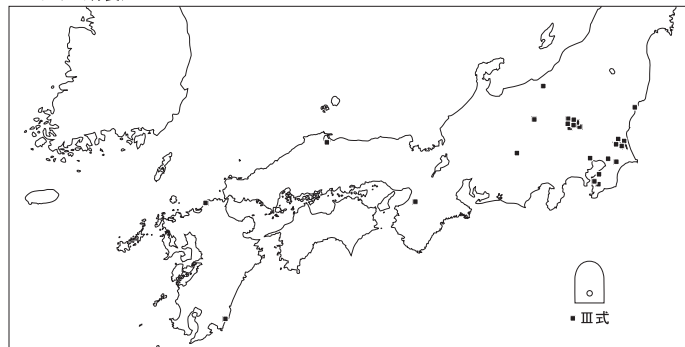
円頭大刀の出土地 鳥居松遺跡で出土した円頭大刀は、前節で明らかにしたように、6世紀前葉（TK10 型式古相期）に朝鮮半島の加耶もしくは百済で製作された可能性が高く、彼の地から倭にもたらされたと考えられる。円頭大刀が伊場大溝に沈められたのは6世紀後葉（TK43 型式期）であるので、その使用期間は比較的長いといえる。鳥居松遺跡例の柄頭や柄間には数多くの補修の痕跡が認められるが、装飾大刀の長期間の使用をうかがわせる特徴として認識できよう。

前節に示した円頭Ⅰ式やⅡ式、Ⅳa式といった古い段階の円頭大刀の出土地は、朝鮮半島南部のほかに、日本国内では近畿地方中枢部と出雲に集中する。古い段階の円頭大刀が近畿地方中枢部に比較的多くみられることを勘案すると、古式の円頭大刀は、倭王権中枢部やその周辺勢力が、朝鮮半島から積極的に入手していたとみられる。鳥居松遺跡から出土した円頭大刀も、倭王権との関係を通じて、西遠江地域の有力者の手に渡されたものと想定してよい。

Ⅰ・Ⅱ式（金銀装）、Ⅳa式（古式鉄製象嵌装）



Ⅲ式（金銅装）



Ⅳb式（新式鉄製象嵌装）

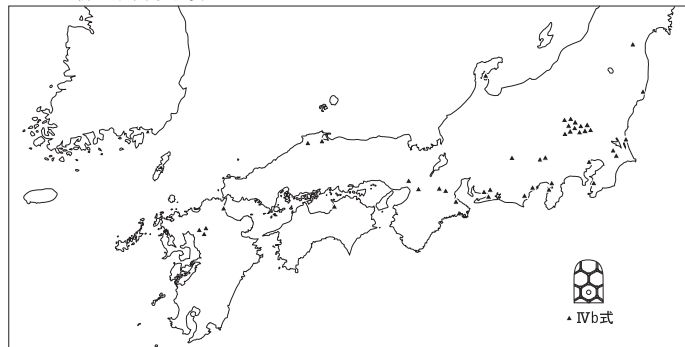


Fig.87 円頭大刀の分布

円頭大刀は、Ⅱ式もしくはⅣb式の古い段階で倭において試作的な製品が作られるようになり、Ⅲ式（金銅装）やⅣb式（鉄製銀象嵌装）の新しい段階において大量生産される。円頭Ⅲ式出現以降、円頭大刀の出土地は、関東に集中する傾向を強めるが、円頭Ⅲb式にみられる装具の画一性と、西日本地域でも少ないながら円頭Ⅲ式の出土例がみられることから、その製作地は近畿地方と捉えてよいだろう。

円頭大刀所有の意味 金銅装である円頭Ⅲ式は、上野、常陸、上総、下総の出土例が圧倒的に多く、これらの地域の出土例だけで、円頭Ⅲ式全出土量の6割を超える。円頭Ⅲ式の分布から明らかのように、円頭大刀においても他の装飾大刀で注目されているような分布の偏在性が指摘できる。

特定の装飾大刀にみられる分布の違いと、出土古墳の特徴、文献上における有力氏族の勢力基盤などの分析から、単龍鳳環頭大刀と大伴氏、双龍環頭大刀と蘇我氏、頭椎大刀と物部氏との関連が指摘されている（桐原 1969、清水 1983、新納 2002）。特徴的な分布状況から、円頭大刀の保有についても、同様に有力氏族との結びつきを想定することも許されよう。円頭大刀と同様に関東地域に出土例が集中する装飾大刀として、頭椎大刀があげられる。円頭大刀と頭椎大刀は形態変化の上でも親縁性が高く、佩用者の性格も近似したものであった可能性がある。

東海における装飾大刀の分布 視点を地域史に移し、東海における装飾大刀の分布状況について触れておこう（岩原 2001、大谷編 2006）。東海では西部と東部で装飾大刀の分布に差が認められる。東海西部における装飾大刀の分布は、近畿中枢部と同様に希薄な傾向が見出せる。東海西部は、倭王権の安定的な勢力基盤であったことがその要因としてあげられるだろう装飾大刀の多量配布を必要としない地域秩序が形成されていたとみられる。

いっぽう、渥美半島基部から遠江、駿河にかけての東海東部は、装飾大刀の集中が顕著である。東海西部に想定した安定的な勢力基盤とは異なり、倭王権が地域の中小勢力を直接的に掌握する必要から、数多くの装飾大刀が下賜された結果と捉えられる（向坂 1971）。単龍鳳環頭大刀が東遠江や東駿河に集中するほか、獅噛環頭大刀や頭椎大刀が東海東部に数多くみられる点が特徴としてあげられる（Fig.88、鈴木 2006）。東海東部は関東地域に至る主要経路上にあたり、倭王権から重視されていた表れとみなせる。

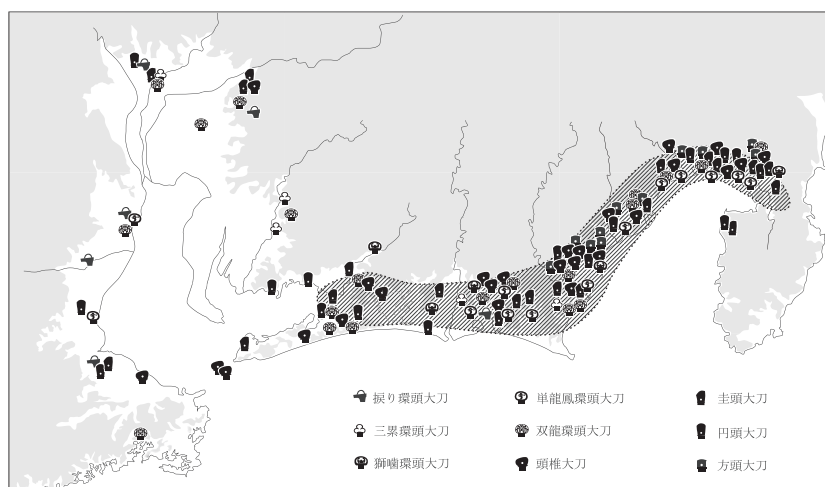


Fig.88 東海における装飾大刀の分布

古式の円頭大刀にかんしては、掛川市宇洞ヶ谷横穴（向坂ほか 1971）に円頭Ⅱ式の出土が確認できる。同横穴からは、単龍鳳Ⅳ式（新納 1982）に位置づけられる単龍環頭大刀や金銅装馬具が共伴し、その被葬者像として地域を統括する中核的な首長層が想定できる。鳥居松遺跡例のような稀少品

を入手しえた有力階層の具体像をうかがう事例として特筆できるだろう。

(3) 自然河川に対する儀礼

鳥居松遺跡例は、自然河川（伊場大溝）の川底から出土した。円頭大刀は鞘から抜かれた抜き身の状態で川の流れの方向に併行して出土しており、単に廃棄されたものではないことが明確である。川底に沈めた行為の背景には、何らかの儀礼的な意味があったことは十分に予想できる。装飾大刀の拵えの一部が自然河川や集落内の遺構から出土することはあっても、本例のような稀少品が、完全な形を保ったままで自然河川から出土することは全国的にみても例がない。川底から装飾大刀が出土する意味について、儀礼行為と共伴遺物をもとに考えてみたい。

鞘を抜く行為 鳥居松遺跡から出土した円頭大刀は、鞘を抜いた状態で川底に沈められていた。刀剣類が鞘から抜かれて扱われることは、前期から中期の古墳副葬品に見出すことができる。滋賀県雪野山古墳では、竪穴式石室内に副葬された7点の刀剣類のうち、被葬者を囲む中央区画の刀1点と剣2点には鞘がなく、布が直接巻かれていた。被葬者の足元にあたる棺内南区画の刀1点と剣1点および棺外から出土した剣2点は鞘に納められていた。被葬者を取り囲む最も重要な位置に置かれる刀剣のみが鞘から抜かれていたことが分かる。鞘から刀剣を抜く行為には、刀剣がもつ呪力を強調する意味があったとみられよう。

古墳時代後期になると、金や銀で飾った装飾大刀が古墳副葬品として広く普及し、刀の取り扱い方も大きく変化する。古墳時代後期の装飾大刀は鞘入りの状態で扱われることが一般的であり、鞘を抜いて副葬していると想定できる事例は皆無に等しい（註1）。古墳時代後期の装飾大刀は、柄頭や柄間の造形のみならず、鞘にも多様な装飾が施される。刀の象徴性を強調する際にも、外見的な特徴が重視され、鞘入りの外装がもつ意味が増していたとみられる。

鳥居松遺跡の事例にみられた金銀装の装飾大刀を鞘から抜く行為は、後期古墳への副葬概念とは異なる祭儀的な意味が強かったことを示唆している。鞘を抜くことによって、儀礼に用いる刀の呪力を高めることが期待されたと考えられ、前期古墳の葬送儀礼に通底する伝統的な祭儀意識の表れとみなせる。

川底の出土状態 鳥居松遺跡から出土した円頭大刀の出土位置は、伊場大溝の底部ほぼ中央、標高-1.8mにあたる。刀身が川の流れの方向とほぼ一致し、切先が上流に向けられていた。現代の建物基礎杭による影響がみられるものの、ほぼ水平を保った出土状態といえ、川底に丁寧に沈められたものと判断できる。円頭大刀が沈められた6世紀後葉の伊場大溝は、ある程度の水量があったとみられ、大刀を用いた祭儀の対象は川の精霊であったと推測できる。

円頭大刀と近接した位置で検出した土器集積（SX05）も、円頭大



Fig.89 雪野山古墳における刀剣の出土状況

刀を沈めた行為との関連をどの程度見積もるか検討の余地はあるものの、同じ時代に執り行われた河川に対する祭祀の痕跡とみてよい。SX05 から出土した遺物には、祭祀具として特化した特別な器物はみられないが、完形の状態に近い須恵器坏類や土師器高坏が多い点は注目できる。伊場大溝の一般的な堆積層から出土する遺物群には、土師器の甕が多く含まれることと対照的なあり方を示している。SX05 出土遺物は、同時期の古墳に副葬する土器組成との類似点が指摘でき、飲食物を供献する儀礼がなされた可能性がある。

装身具の出土 伊場大溝は、上流部から梶子遺跡（9 次調査地点）、伊場遺跡、鳥居松遺跡の 3 箇所の調査地点で底面まで調査されているが、それぞれ 6～7 世紀の堆積土から耳環や玉類などの装身具の出土が確認されている。

耳環は梶子遺跡（浜文協 1994）と伊場遺跡（浜松市教委 1997）でそれぞれ 3 点が出土している。鳥居松遺跡の調査で出土した 2 点を合わせて、伊場大溝からの耳環の出土数は合計 8 点を数える。東西 1km ほど離れた地点でそれぞれ出土が確認できることから、伊場大溝内に含まれる耳環は相当数にのぼると捉えられる。

玉類にかんしては、梶子遺跡で碧玉製管玉 1 点の出土が知られ、鳥居松遺跡では碧玉製管玉 2 点、蛇紋岩製管玉 1 点、ガラス小玉 4 点、滑石製小玉 2 点、蛇紋岩製小玉 1 点を確認できた。鳥居松遺跡では、玉類はいずれも伊場大溝底面に近い湧水が顕著な層位から出土している。湧水を伴う環境下で、検出作業が困難であったことを考慮すると、伊場大溝内にもたらされた玉類はさらに多かったと想定できよう。

これら装身具も、円頭大刀と同様、何らかの祭儀に伴って川底に沈められたものが多かったと捉えられる。装飾大刀、飲食物を入れる須恵器や土師器、耳環、玉類などは同時代の古墳副葬品と共

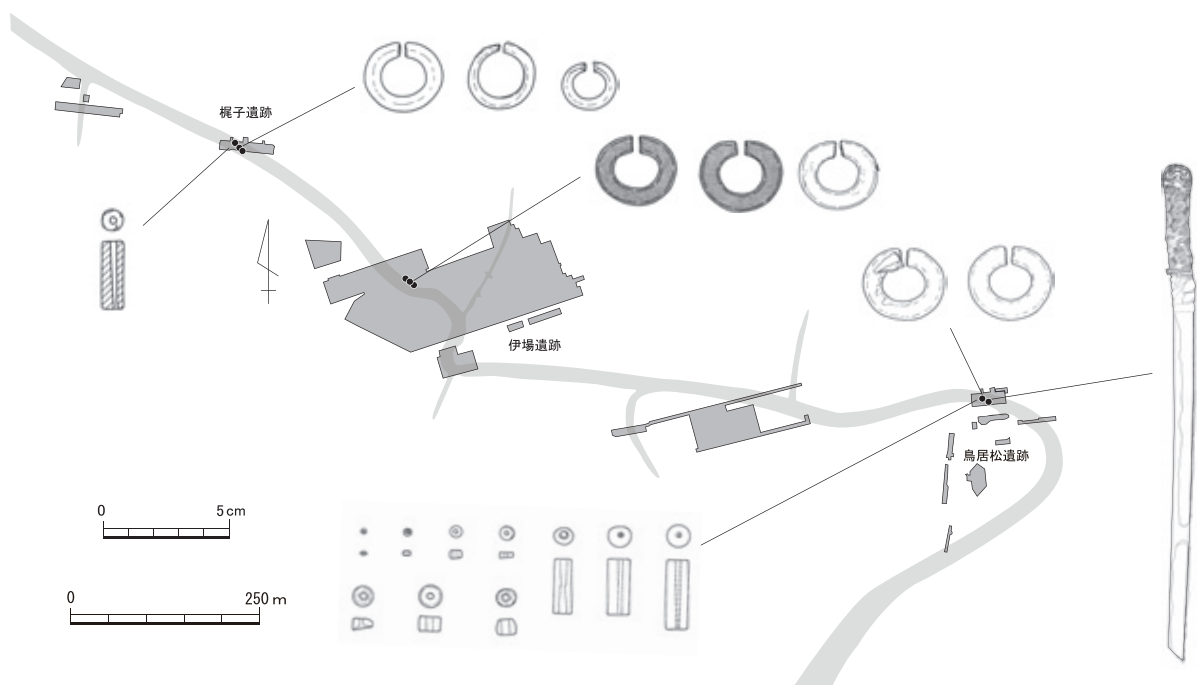


Fig.90 伊場大溝における装身具の分布状況

通する品目である。伊場遺跡群周辺の浜松市南部地域では、古墳の造営数が少なく、従来、6～7世紀の地域勢力の動態が不明瞭であった。しかし、今回確認された装飾大刀をはじめ、耳環、玉類など数多くの稀少品が伊場大溝内に沈められていることに注目すると、この地域にも有力古墳を築きうるような実力をもった有力階層がいたことがうかがえる。

6～7世紀の伊場大溝の堆積層からは、大量の土器とともに、韃羽口や鉄滓、漆が付着する土器などが出土している（第2分冊『伊場大溝編』第3章6）。小規模ながら鉄器や漆に関連する物品が生産されていたとみられる。韃羽口や鉄滓は、梶子遺跡でも出土しており、伊場大溝に沿った広範囲で鉄器が生産されていたと考えられる。6～7世紀の伊場遺跡群で想定できる手工業生産は、有力階層の経済基盤の一つであった可能性が高い。

伊場遺跡群の隆盛 鳥居松遺跡を含む伊場遺跡群には、7世紀後葉には評に関連する施設が置かれ、奈良時代から平安時代にかけて敷智郡家として地域社会の中心地となる（浜松市教委2008）。古代国家は地元の有力者を郡司に任命し、郡家の経営にあたらせている。敷智郡家が置かれる浜松南部地においても、後に郡司に任命されるような古墳時代の有力階層の存在が推測されていたが、周辺地域には有力な古墳や飛鳥時代の寺院などは見られず、その具体的な姿は明らかにされていなかった。

鳥居松遺跡における円頭大刀の出土によって、伊場遺跡群を勢力基盤とした6世紀代の有力者が具体的に想定できるようになった意義は大きい。また、伊場大溝から出土する豊富な遺物から、7世紀に至るまで伊場遺跡群において地域の有力階層の勢力が維持され続けたと想定できる。円頭大刀を入手した有力者の末裔が、後の郡家経営の有力な担い手となったと想定することは充分許されよう。

（4）結 語

ここまでの検討によって明らかにされた伊場大溝における円頭大刀出土の意義は、次の3点に集約できる。

- 1) 円頭大刀の編年や装飾大刀の模様系譜、製作技術の検討に重要な情報を提供した。
- 2) 装飾大刀を川底に沈める儀礼の痕跡を日本国内で初めて確認した。
- 3) 6世紀の浜松南部地域に、有力階層の存在が具体的に示せるようになった。

1) の具体的内容は、前節において展開したとおりである。鳥居松遺跡から出土した円頭大刀は朝鮮半島の加耶もしくは百済で製作され、倭王権の膝下である近畿地方中枢部を経て、当地にもたらされたと想定できる。稀少な装飾大刀が西遠江地域の有力者に与えられたのは、6世紀における倭王権の東国掌握の足がかりとして、当地の重要性が高まったことの反映とみる。

2) の評価にかんしては、今後の類例の増加を待って慎重に議論を重ねる必要がある。装飾大刀を川に沈めることは、河川に宿る精霊への供儀の意味があったとみられるが、具体的な儀礼の目的までは明確にできない。装飾大刀が鞘を除いた抜き身の状態で扱われることも異例である。刀剣を鞘から外す行為には、前期古墳の副葬行為に通底する伝統的な祭儀意識の表れと捉えられる。

なお、円頭大刀に表された龍には、水神や馬との関連が数多く見出せる（石田1966）。伊場大溝

の奈良時代の堆積層からは馬骨を始め、土製・木製の馬形が数多く出土している。装飾大刀とこれら古代の祭祀関連遺物との関連についても検討を進める必要がある。

3) については地域史を再構成する上で、重要な意味をもつ。円頭大刀の保有には、単龍鳳環頭大刀などとは異なる佩用者の性格が反映されているとみられ、6世紀代の西遠江勢力の具体像をうかがう上で重要な検討材料になりうる。7世紀後葉以降、敷智郡（測評）の役所が伊場遺跡群に置かれる前提となる勢力基盤が、6世紀代の当地にあったと捉えることも可能になった。

今回実施した鳥居松遺跡の調査によって、伊場遺跡群の内容は空間的にも、時期的にも従来の認識を超える広がりをもつことが明確になった。円頭大刀の出土という調査結果を経て、伊場遺跡群の探求は、新たな段階に突入したといえるだろう。

【註】

1 岡山県穴が辻古墳から出土した円頭大刀は、鞘から抜かれた状態で副葬された可能性が指摘されているが（上村 2008）、こうした事例は極めて珍しい。

【参考文献】

- 上村 武 2008「穴が辻古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告書 213』岡山県教育委員会
石田英一郎 1966『新版 河童駒引考—比較民族学的研究—』東京大学出版会
大谷宏治（編） 2006『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
岩原 剛 2001「東海の飾大刀」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
桐原 健 1969「頭椎大刀佩用者の性格」『古代学研究』第 56 号 古代学研究会
清水みき 1983「湯舟坂 2 号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂 2 号墳』久美浜町教育委員会
鈴木一有 2006「東海の馬具と飾大刀にみる地域性と首長権」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
新納 泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第 65 巻第 4 号
新納 泉 2002「古墳時代の社会統合」『倭国と東アジア』日本の時代史 2 吉川弘文館
浜松市教育委員会 1997『伊場遺跡遺物編 7』
浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』
（財）浜松市文化協会 1994『梶子遺跡Ⅸ』
向坂鋼二 1971「飾大刀について」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』静岡県教育委員会
向坂鋼二ほか 1971『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』静岡県教育委員会

【図出典】

Fig.89 福永伸哉・杉井 健（編） 1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 より改変のうえ引用

Fig.90 梶子遺跡 9 次調査出土品：浜文協 1994、伊場遺跡出土品：浜松市教委 1997 より引用のうえ、筆者作成